

紀 要

第 3 号

目 次

序

1. お米を作りだしたころ……………(浜崎悟司・細川修平・奈良俊哉)
 2. 滋賀県下の方形周溝墓の“供献土器”について……………(吉田秀則)
 3. 手焙形土器雑想
—葛籠尾崎湖底遺跡出土品に寄せて—……………(小竹森直子)
 4. 三つの古墳の墳形と規模
—近江における古墳時代首長の動向および特質メモ作成のために—
……………(用田政晴)
 5. 野洲川下流域の古代豪族の動向
—近江古代豪族ノート4—……………(大橋信弥)
 6. 満願寺廃寺出土瓦の産地……………(三辻利一・北村大輔・北村圭弘)
 7. 信楽と丹波……………(松澤 修)
 8. 人形茶碗・人形手茶碗
—考古学的視座からのアプローチ—……………(稲垣正宏)
-

1990. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

6. 満願寺廃寺出土瓦の産地

(奈良教育大学) (びわ町教育委員会)

三 辻 利 一・北 村 大 輔・北 村 圭 弘

1. はじめに

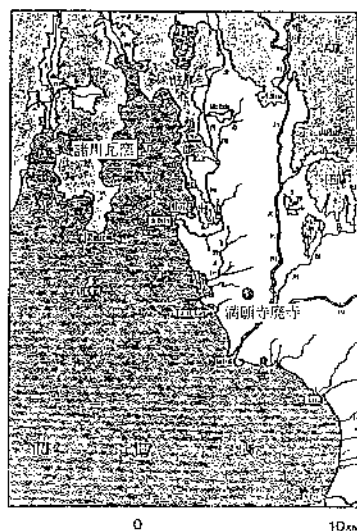
旧近江一国からなる滋賀県は、多くの古代寺院遺跡が存在する地域として著名である。わけても、いわゆる飛鳥・白鳳時代に属すといわれる寺院跡は65箇所前後を数えるに至っている。この数はかつて畿内を構成した大阪府、奈良県に次いで多いものであり、当該期の地域史を考える上で看過できない存在であることは多言を要しない。

この近江の古代寺院については、最近刊行の『近江の古代寺院』により、これまでの研究成果が集大成され、研究はひとつの大きな画期を迎えることとなった。今後近江の古代寺院研究は大きく進展することと予想されるが、そのなかにおいて寺院の象徴ともいべき屋瓦の需給関係の解明は、地域史研究上の重要な課題のひとつになり得ると思われる。

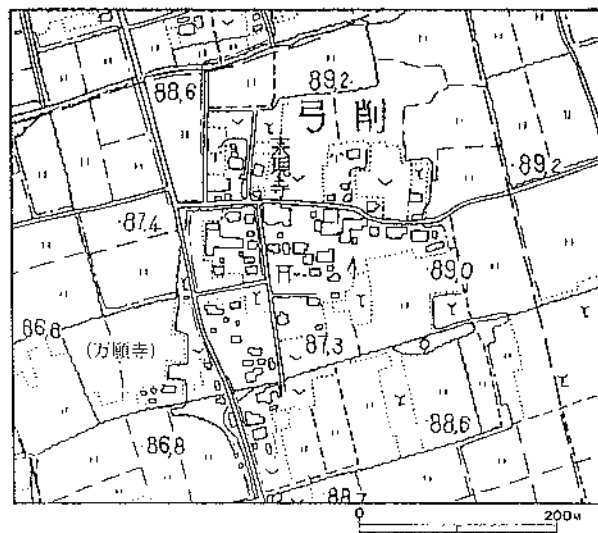
ここで出土瓦の産地について触れようとする満願寺廃寺は、「山田寺式」軒瓦や近江特有といわれる「軽野寺式」軒瓦⁽¹⁾が濃密度に分布する湖北地域にあっては異彩を放つ存在として知られている。またここで出土する瓦類には個性的な文様をもつものが多いため、型式分類がしやすくこの個性をいかせば産地の識別という点でも有効な資料となりうる可能性が充分予想されるのである。

小稿では以上の予想のもとに、満願寺廃寺出土の瓦類について、考古学と分析化学の両側面から産地の検討をおこない、これまで漠然と知られるにすぎなかった当廃寺の様相の一端を考察してみたい。

(北村圭弘)



第1図 満願寺廃寺と関連遺跡の位置



第2図 満願寺廃寺の推定寺域

2. 遺跡の概要

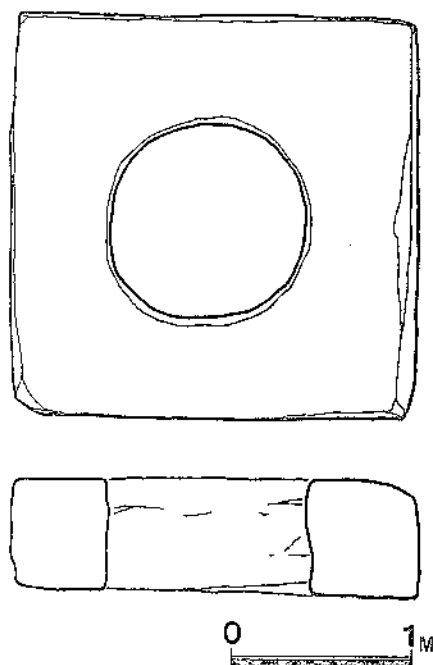
満願寺廃寺は琵琶湖北東部の滋賀県^{ひがしあざい}東浅井郡^{あうげ}びわ町弓削に所在し、姉川と高時川が河口付近で合流するところより北西へ約2kmの平野部に位置する（第1図）。遺跡の名称は集落南西部の小字名「万願寺」⁽²⁾に因み、この付近では以前より多数の屋瓦や礎石類の出土していたことから、ふるくより古代寺院跡と考えられてきた。

1927年刊の『東浅井郡志』は当廃寺の現状に至る経緯について次のように述べている。「俗傳の告ぐる所に由れば、聖徳太子、弓削大連の居址に就いて、伽藍を建立し、自ら聖観音堂の佛像を彫刻して之を安置し、以って満願寺と號せしといふ…(中略)…建長年間祝融の災あり。一山蕩然として地を掃ひ纔に本尊の観世音を剩すのみなりしかば、村民等深く之を悲しみ、相謀りて一草堂を造り、之を安置せしに、天正年間に至り再び火災に罹りて、永く荒廢に帰せんとせしを、元和三年尊勝寺の代官日下部善介玄昌私財を拠ち、小谷山の木を伐り、以って堂宇を建立せしといふ。今の観世音即ち是なり。寺の古跡今尚満願寺と稱す。寺町・聖町・寺内・御坊田・経田等の小字名あり。…(中略)…其古跡より往々巨大なる礎石や、布目ある諸種の古瓦を發掘することありといふ。」

如上の観音堂は、集落中央部の来現寺飛地内に所在し、10世紀後半代と推定される重要文化財の観音菩薩立像⁽³⁾を安置する。境内には石製露盤（第3図）を含む多数の花崗岩製礎石類が存在するほか、現状でも多数の古瓦の散布が確認できることから、かつて当地に古代寺院の存在した可能性はきわめて高いと推定される。しかしながら現状での古瓦の散布状況について観察してみると、ふるくより故地とされてきた小字名「万願寺」の付近では稀薄な状況にあり、散布の集中する範囲は集落内の観音堂境内以南の地区にある。集落内の地割りは磁北にちかく、少なくとも周辺部に残る条里地割りには規制されていないことなどを考慮すると、むしろ遺跡は現集落と重複して存在する可能性が高い（第2図）。

なお満願寺廃寺は『和名抄』にみえる「錦部郷」（＝「尔（=迹）之古里」）の比定地・びわ町の現存集落名・大字「錦織」とは直線距離で約300mと近接している。『続日本紀』延暦6年7月条に「浅井郡人錦日佐周興」、『三代実録』貞観16年9月条には「浅井郡人錦村主清常刀」と浅井郡には「錦部」の郷名を冠した人名がみえることから、満願寺廃寺の壇越となとなりうる可能性のある氏族としては「錦部氏」をあげることができる。

（北村大輔・北村圭弘）



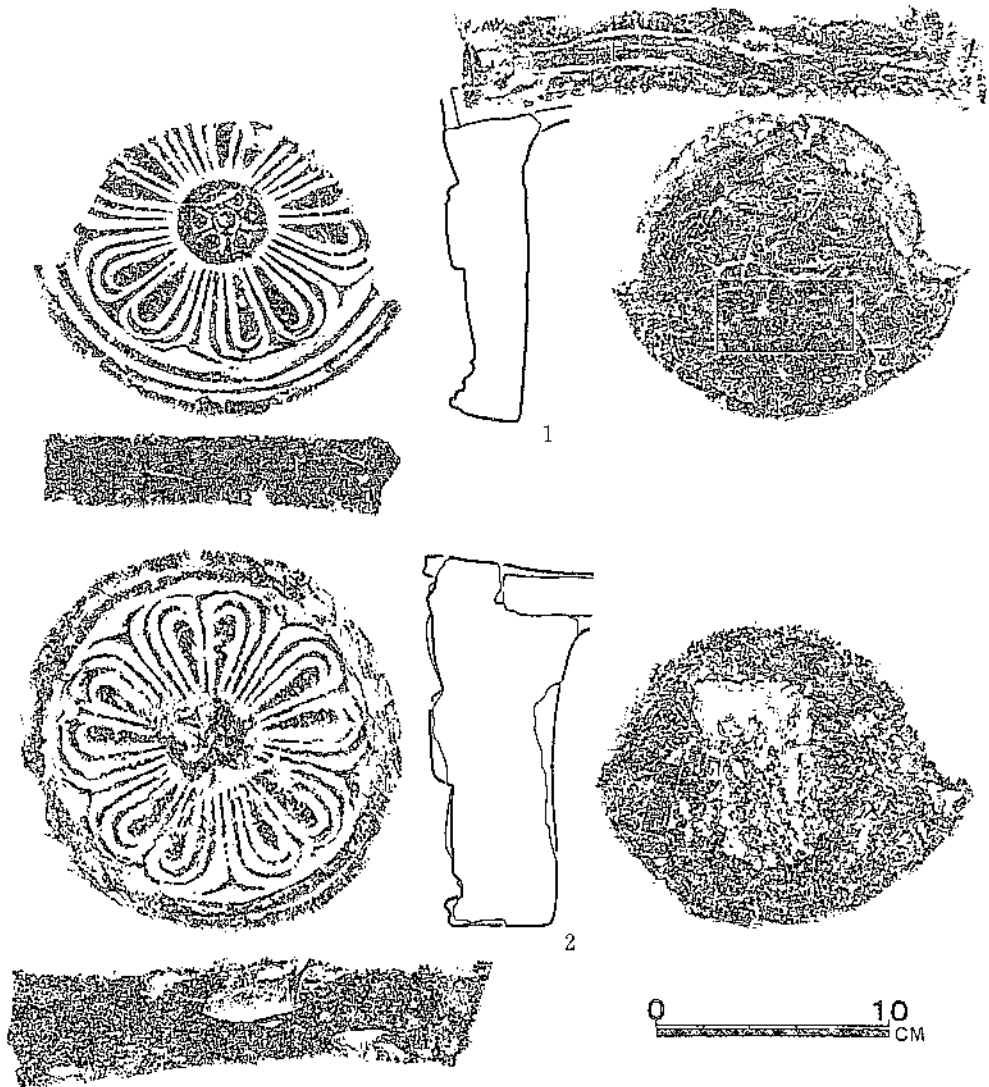
第3図 観音堂境内の石製露盤 S = 1/40

3. 出土瓦の分類と編年

① 出土瓦の分類

ここでの瓦類の形式分類にあたっては、蛍光X線胎土分析による産地の推定をおこなうため、特定の工人が特定の時間内に生産した製品群の抽出ということを最大の目標とした。その理由は瓦の製作者である工人と製作された時間が、瓦の素材粘土の化学特性を規定する最大の要素と考えられるためである。その分類方法は製作過程で瓦に残された工具の痕跡からその原体を識別し、それとその工具を使用し瓦を製作した工人の「作り癖」などの諸要素を連鎖させるというものである。

以下に報告する（第4図～第8図、第1表）なお、資料のすべては不時の出土物である。



第4図 満願寺鹿寺出土軒丸瓦(A類：1～2)S=1/3

軒丸瓦（1～3）

A類（1～3）：瓦当文様は周縁に2重の重圏文をめぐらす複弁5葉の蓮華文で、中房には圏線および界線で画された「1+6」の蓮子を配す。花卉内には、2つの子葉が存在しそれぞれの子葉には、花卉輪郭線とは別に、それをとり囲む線が存在するため、あたかも重弁蓮華文かのような印象を与える。この瓦当文様は全国的にみてもきわめて類例の少ないものであり、至近の下八木遺跡のほかには、いまのところ北陸加賀の江沼地域でしか出土していない（第16図）。満願寺廃寺出土品については、これまでのところ91範傷等からすべて同範とみられるが、瓦当厚は個体によって3.5cm前後および5.5cm前後と焼成具合の差とでは理解しにくい大きな相違がみられる。瓦範は周縁部までで、周縁の外側にまで及ぶ立ち上がりのないものの可能性が高い。焼成はややあまいものが多く、色調は灰褐色を呈すものが多い。

軒平瓦（4～6）

A類（4）：瓦当文様は5重弧文で、顎部の断面形状は無顎式である。凸面には中軸を端縁に平行させる矢羽状の叩き締めを密に施し、端縁付近については叩き板の方向をかえさらに補足の叩き締めをおこなう。凹面には模骨痕がみえ布目圧痕とともにそのまま残す。端縁の凸面側は横位のナデ、凹面側は横位のヘラケズリをおこなう。焼成は堅緻で灰色を呈す。

B類（5）：顎部の断面形状は曲線顎にちかい無顎式で、瓦当面には周縁に2重の圏線をめぐらす幾何学状の文様をもつ。凸面は縄目の叩き締めを施した後、それをナデにより不完全に消去する。縄目原体はやや粗く、叩き板は短小な可能性が高い。凹面は布目圧痕を丁寧になデ消し、横位に断面方形の棒状圧痕がのこる。焼成は堅緻で褐色かかった黒灰色を呈す。

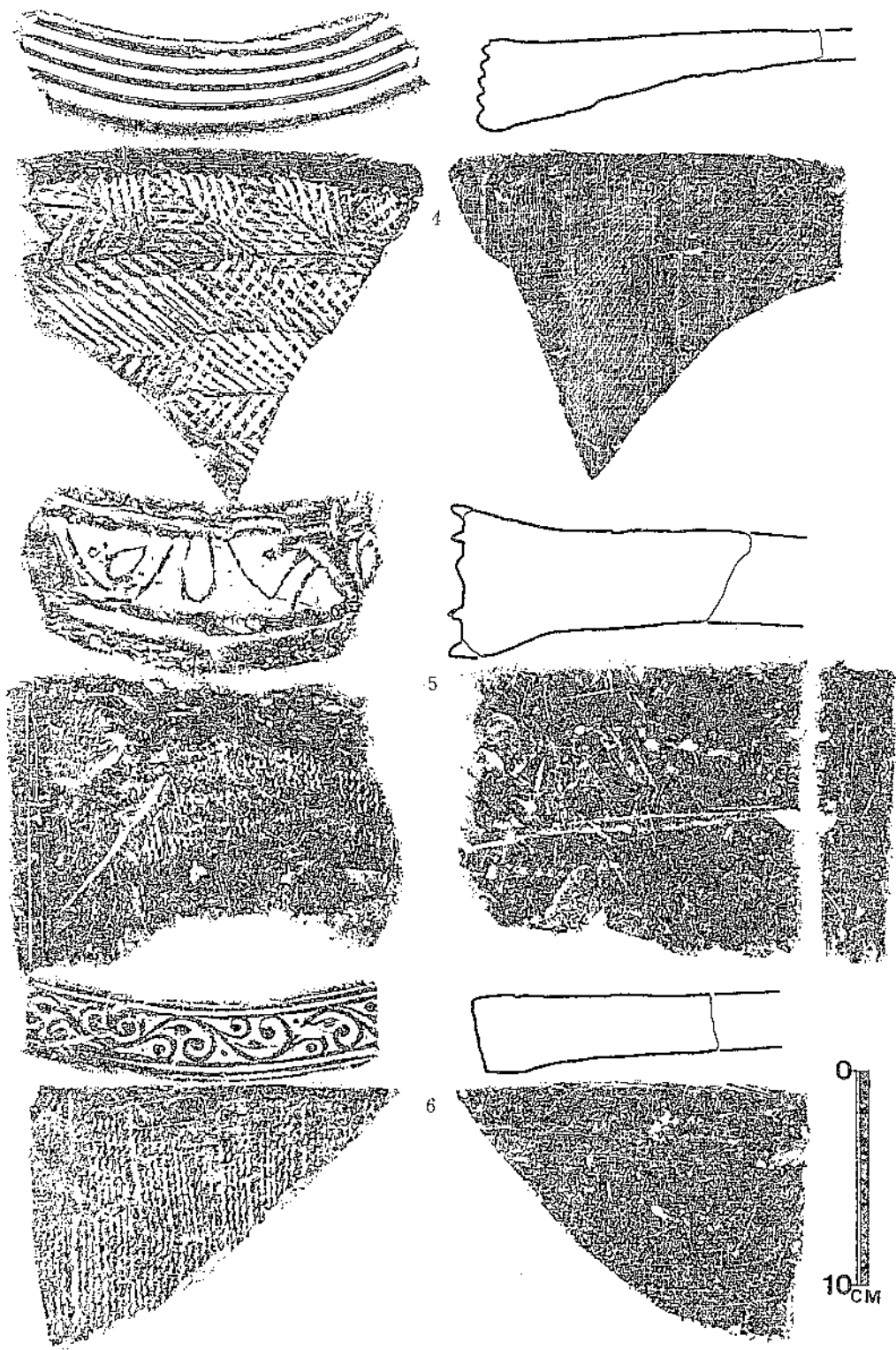
C類（6）：瓦当文様は周縁に3重の圏線をめぐらす変形した均整唐草文で、文葉の巻きが強く先端部は珠文状に変化している。長浜市新庄馬場廃寺出土の同文例から、文様は左右2単位づつ反転しているものと推定される。凸面には縦位の粗い縄目叩きをほどこし、凹面には布目圧痕をそのまま残す。端縁の凸面側は横位のナデ、凹面側はヘラケズリ状の調整をおこなう。焼成は堅緻で黒灰色を呈す。

平瓦（7～59）

A類（7～19）：凸面には軒平瓦A類同様、中軸を端縁に平行させる矢羽状の叩きを密に施すもので、叩き締めは円弧を描く。凹面には布目圧痕をそのまま残し、最大厚は2.0cm～2.6cmによくまとまる。焼成はおおむね堅緻で、同一個体中に酸化部分と還元部分の両方がみられるものが多く、色調は淡い橙色あるいは淡い青灰色を呈す。粘土板桶巻き作りの可能性が高い。

B類（20～24）：凸面に長軸を端縁に平行させる斜格子叩きを密に施し、端面に補足の叩き締めをおこなうものがある。叩き板の原体には格子目の大きいものと小さいものの2種類がみられるが、同一個体に両者が重複しているものもある。凹面には基本的に布目圧痕をそのまま残し、最大厚は2.2～2.5cmによくまとまる。焼成は堅緻で濃い青灰色、もしくは濃い橙色、あるいは同一個体中に酸化部分と還元部分が互層をなすものがみられる。粘土板桶巻き作りと推定される。

C類（25～34）：凸面に細かい縦位の長大な縄目叩きを密に施すもので、凹面には布目圧痕をそのまま残す。最大厚は1.2cm～1.7cmと1.5cmを中心に正規分布を示し、他類と比べて著しく薄い



第5圖 滿願寺麁寺出土軒平瓦(A類：4、B類：5、C類：6)S=1/3

のが特徴である。焼成はややあまい～堅緻で、色調は灰黒色～灰色を呈す。一枚作りと推定されるが、湖北地域の他遺跡出土例同様、「離れ砂」の使用は認められない。

D類 (35) : 凸面に縦位の縄目叩きを施すもので、凹面には布目圧痕をそのまま残す。最大厚は1.9cmをはかり、焼成は堅緻で青灰色を呈す。粘土板桶巻き作りと推定される。

E類 (36) : 凸面にやや粗い短小な縄目の叩きを、叩き締めめの凹弧を描きながら密に施したのち、部分的に方向を変えてさらに叩き締める。凹面は縦位にナデをおこない、布目圧痕を丁寧に消去する。端面付近については横位のヘラケズリをおこなう。最大厚は2.8cmを測る。焼成は堅緻で酸化部分と還元部分が互層をなし、色調は表面が橙色、断面が濃い青灰色を呈す。粘土板桶巻き作りと推定される。

F類 (37) : 凸面にやや粗い短小な縄目の叩き締めに密に施す。凹面は横位のハケにより布目圧痕を丁寧に消去する。最大厚は1.9cmをはかる。焼成は堅緻で濃厚な青灰色を呈す。粘土板桶巻き作りと推定され、諸川瓦窯で酷似品が出土している (第14図)。

G類 (38) : 凸面にやや粗い縄目叩きを施したのち、それを不完全ながら消去する。凹面布目圧痕はそのまま残し、最大厚は2.7cmをはかる。焼成は堅緻で濃い青灰色を呈す。粘土板桶巻き作りと推定される。

H類 (39～40) : 凸面を縦位にヘラケズリするもので、凹面は基本的に布目圧痕をそのまま残すが、端面付近は横位にヘラケズリをおこなう。最大厚は2.7cm～2.8cmをはかる。焼成は堅緻で橙色を呈す。粘土板桶巻き作りと推定され、諸川瓦窯で類似品が出土している。

I類 (41～44) : 最大厚が3.8cm～5.2cmと他類と比べて著しく厚いものである。焼成のあまいことも特徴のひとつであるため、形成や調整方法については不明な部分が多い。しかし、焼成は必ず同一個体中に酸化部分と還元部分が互層をなして存在し、色調は表面が淡い青灰色、断面が淡い橙色を呈すなど、他類と区別される要素の多くみられることから、ひとつの形式として設定した。その他 (45～59) : 破片が小さい、あるいは磨滅がはげしいなどのことから、形式設定のおこないがたい、あるいはできないものである。先に分類した軒平瓦の一部や平瓦の一部が含まれているものと想定されるが、これらとは別の形式として認められるものが含まれている可能性も高い。混乱を避けるため敢えて分類しないでおく。

丸瓦 (60～67)

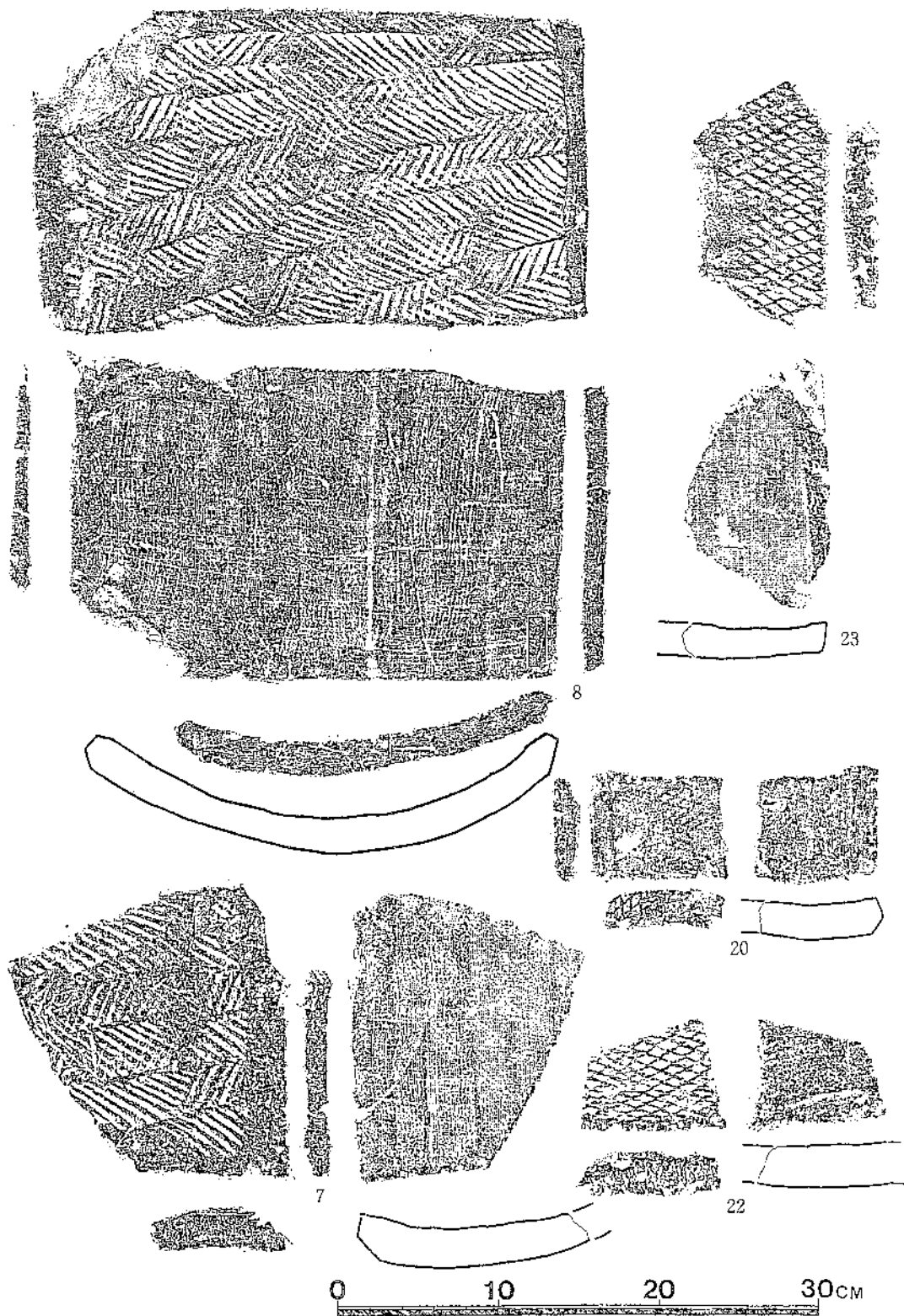
A類 (60～63) : 行基葺式の丸瓦である。凸面はナデにより無文化するものが基本だが、それ以前に縄目叩きの施されていたことがわかるものもある。凹面の布目圧痕はそのまま残す。さらに細分できる可能性が高いが、混乱を避けるため分類しないでおく。

B類 (65) : 玉縁式の丸瓦で、凹面布目はそのまま残す。凸面については磨滅しておりよくわからない。筒部の最大厚は2.0cmで、焼成はややあまく灰褐色を呈す。

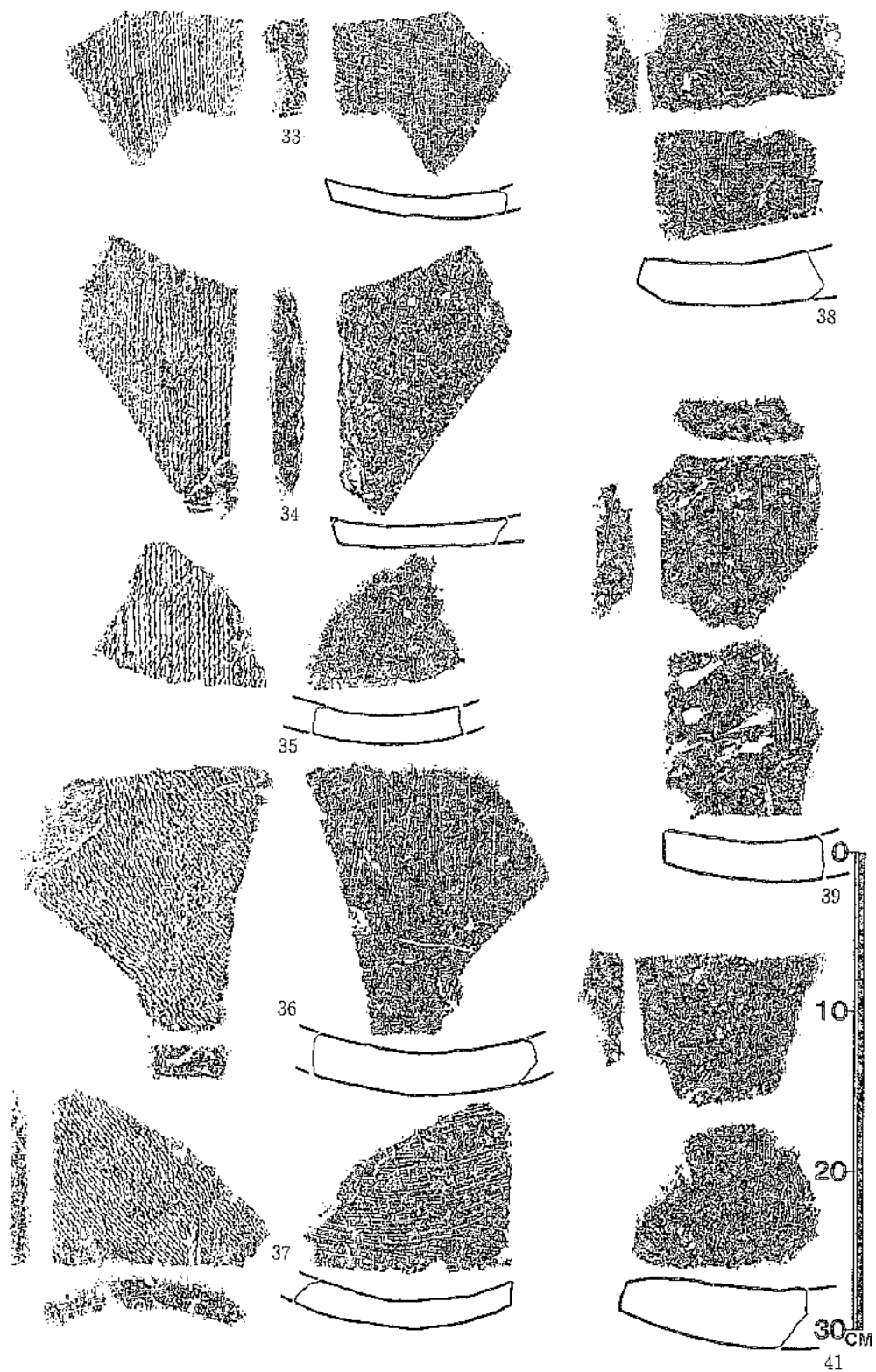
その他 (65～67) : 筒部の小片で、断面形状等から丸瓦と推定されるものである。混乱を避けるため敢えて分類しないでおく。

② 出土瓦の編年

以上の報告にもとずき以下では軒平瓦を標識として出土瓦の編年をおこない、屋瓦の供給にか

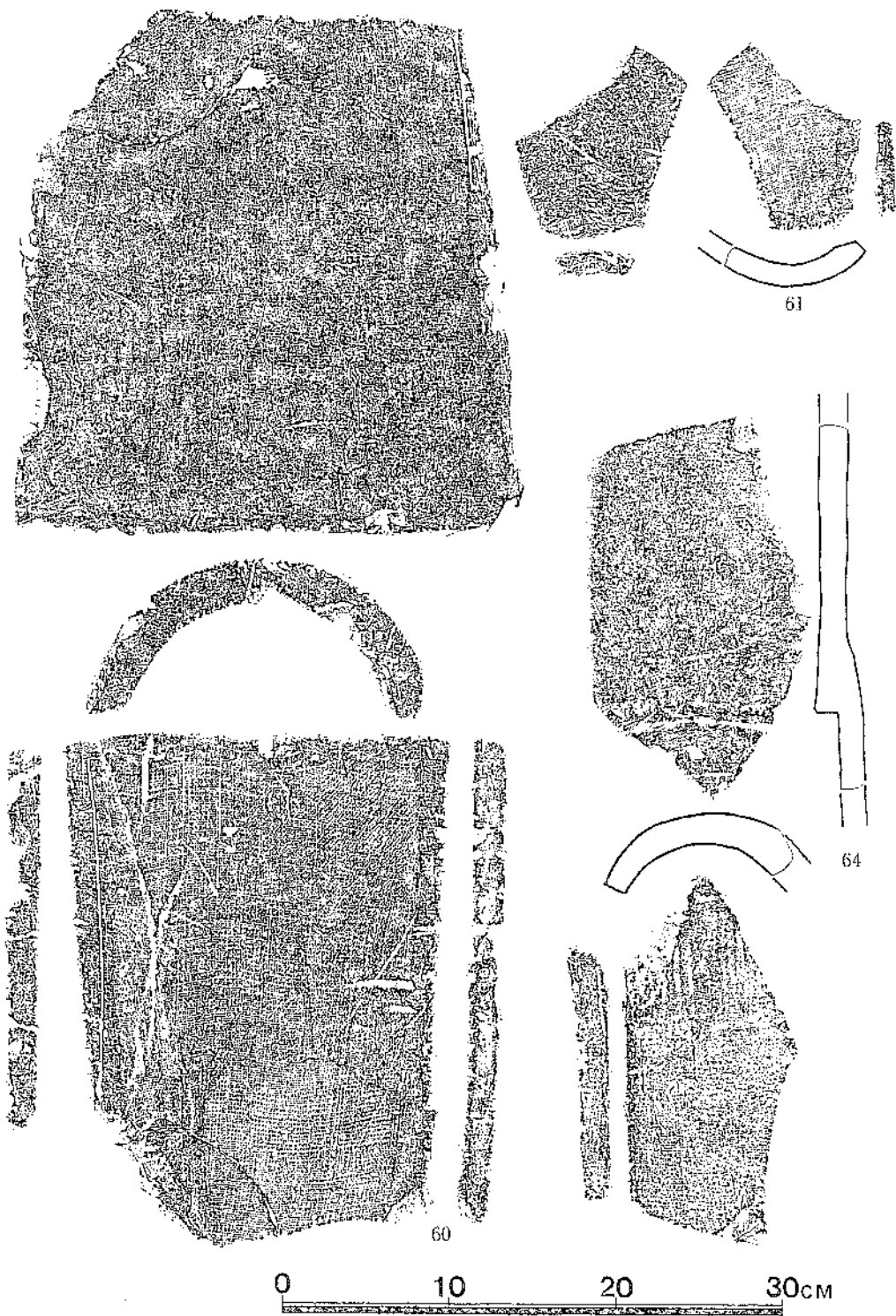


第6圖 滿願寺麁寺出土平瓦(1)(A類：7、8、B類：20、22、23) S = 1/4



第7圖 滿願寺麁寺出土平瓦(2)

(C類: 33、34、D類: 35、E類: 36、F類: 37、G類: 38、H類: 39、I類: 41) S = 1/4



第8図 満願寺鹿寺出土丸瓦(A類:60、61、B類:64) S=1/4

かる3つの画期を想定しておきたい。

まず第1期は軒平瓦A類を標識とする時期である。軒平瓦A類は無類式で5重弧文の瓦当文様を有し、出土した軒平瓦のなかでは最も古式を呈している。これと同様の技術で作られた平瓦にA類があり、粘土板桶巻き作りで出土の相対量も多いことから、当該期が創建に伴うものと想定される。軒丸瓦については、同範の1形式、つまり複弁5葉蓮華文のA類しか出土していないことから、現状ではこれが創建瓦に想定される。丸瓦については十分な分類はなされなかったが、A類が行基葺式であることから、少なくともこの一部が創建期に伴う可能性が高い。この第1期の時間的な位置付けについては、如上のような瓦類のセット関係や全国的にみても類例の少ない軒丸瓦の類例(第16図)等から白鳳期に比定して大過ないものと思われる。

ついで第2期は軒平瓦B類を標識とする時期である。軒平瓦B類は幾何学状の瓦当文様をもつが、全体的な印象としては平瓦G類に類似し、技術的には桶巻き作りの可能性が高いことから、第1期と第3期の間に位置付けるのが妥当と思われる。ただし平瓦G類は相対的な出土量が著しく少ないことから差し替え等の小規模な補修用に使われたものと推定される。平瓦B、D～F、H～I類についても同様で、桶巻き作りであるが出土量が著しく少ないため、現状では第2期に分類しておくのが自然と思われる。丸瓦については、平瓦が桶巻き作りであることから、それに対応する行基葺式の丸瓦A類の一部が伴うものと思われる。

最後に第3期は最も新しい要素を持つ軒平瓦C類を標識とする時期である。この軒平瓦と製作技術および胎土、焼成等ともに酷似するのが平瓦C類であり、一枚作りの可能性が高い。この平瓦は相対量も多いことから、ある程度の規模の補修用あるいは改修用の瓦として使用された可能性がある。丸瓦についてはB類が玉縁式であることから、これが伴うものと推定される。第3期の時間的な位置付けについては、変形した均整唐草文軒平瓦の存在や、平瓦が一枚作りであること、丸瓦に玉縁式が見られることなどからおおむね奈良時代の末期から平安時代にかけての時期を想定してよいと思われる。

(北村圭弘)

4. 出土瓦の蛍光X線胎土分析

ここでは以上の出土瓦の蛍光X線分析の結果について報告する。

分析値は岩石標準試料JG-1に対する標準化値であらわし、第1表にまとめてある。データはまず、これらの瓦がグルーピングできるかどうかという観点から解析された。

はじめに、定性的にグルーピングできるかどうかをみるため、第9図にRb-Sr分布図を描いたところ、3群に分類されることが分かった。I'群にはK、Rb量が多く、逆にII群にはK、Rb量が少ない。そしてI群は両者のほぼ中間に分布した。さらに第1表の分析値を点検すると、II群にはFe量のみならず、Ca量も著しく多いことがわかる。

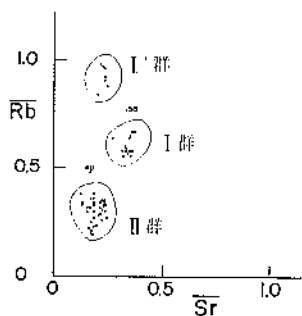
つぎにこの定性的な分類が定量的にみても許容されるかどうかをみるため、I、II両群を母集団とする2群間判別分析を試みた。この結果を第10図に示す。両軸にとったD(I)、D(II)はそれぞれI群、II群の重心からのマハラノビスの汎距離である。マハラノビスの汎距離とは、母集団の重心から何 σ (標準偏差)分、離れているかを示す統計学上の距離のことである。Dの値

第1表 満願寺廃寺出土瓦の観察表と蛍光X線分析試料のデータ

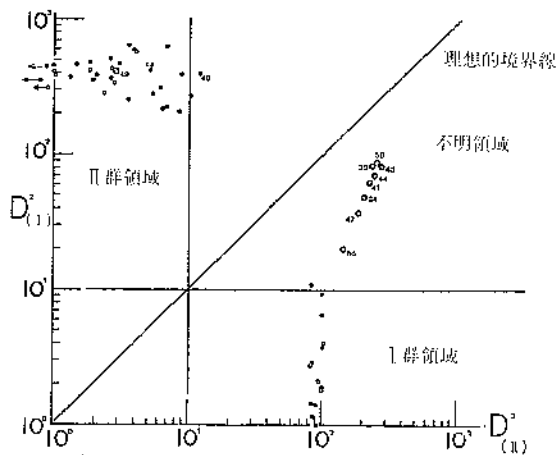
番号	種別	型式	凸面	凹面	厚み (最大・cm)	色調	焼成	備考	K	Ca	Fe	Rb	Sr	産地 分類	
1	栴丸瓦	A	-	-	中房部 3.5	灰褐色	堅緻	①	-	-	-	-	-	-	
2	〃	〃	-	-	中房部 5.5(埋)	〃	あまい	②	-	-	-	-	-	-	
3	〃	〃	-	-	?	〃	堅緻	③	-	-	-	-	-	-	
4	軒平瓦	A	矢羽状叩き	布目そのまま残す	-	青灰褐色	堅緻	④	-	-	-	-	-	-	
5	〃	B	細目叩き→不完全消去	布目ナデ消し	-	灰黒色	〃	⑤	-	-	-	-	-	-	
6	〃	C	細目叩き	布目そのまま残す	-	〃	〃	⑥	-	-	-	-	-	-	
7	平瓦	A	矢羽状叩き	布目そのまま残す	2.6	淡い橙褐色	あまい	○	-	-	-	-	-	-	
8	〃	〃	〃	〃	2.4	〃	〃	○	-	-	-	-	-	-	
9	〃	〃	〃	〃	2.4	〃	〃	○	-	-	-	-	-	-	
10	〃	〃	〃	?	2.1	淡い橙褐色 (淡い青灰色)	〃	⑦	0.723	0.221	3.45	0.568	0.343	I	
11	〃	〃	〃	?	2.1	(〃)	ややあまい	⑧	0.668	0.156	3.14	0.558	0.353	I	
12	〃	〃	〃	布目そのまま残す	2.3	(〃)	堅緻	⑨	布目23×28本 (3×3cm)	0.699	0.168	3.01	0.674	0.371	I
13	〃	〃	〃	布目一部ナデ消し	2.0	(〃)	〃	⑩	0.727	0.180	3.07	0.669	0.370	I	
14	〃	〃	〃	〃	2.1	淡い橙褐色	〃	⑪	0.644	0.166	2.84	0.576	0.360	I	
15	〃	〃	〃	布目そのまま残す	2.5	淡い青灰色	〃	⑫	布目22×30本 (3×3cm)	0.629	0.153	2.95	0.582	0.354	I
16	〃	〃	〃	布目一部ナデ消し	2.2	〃	〃	⑬	0.648	0.168	3.05	0.595	0.328	I	
17	〃	〃	〃	布目そのまま残す	2.4	〃	〃	⑭	0.683	0.177	2.75	0.642	0.345	I	
18	〃	〃	〃	〃	2.6	橙褐色	〃	○	0.639	0.140	3.08	0.556	0.316	II	
19	〃	〃	〃	布目一部ナデ消し	2.6	淡い橙褐色 (淡い青灰色)	〃	⑮	0.651	0.179	2.38	0.587	0.329	I	
20	〃	B	格子叩き	布目そのまま残す	2.2	橙褐色	ややあまい	○	器面叩き	0.271	1.12	5.72	0.189	0.178	II
21	〃	〃	〃	〃	2.4	灰褐色	〃	⑯	0.556	0.665	3.08	0.634	0.268	I	
22	〃	〃	〃	?	2.5	濃い青灰色	堅緻	⑰	器面叩き	0.387	1.47	6.89	0.274	0.242	II
23	〃	〃	〃	布目そのまま残す	2.2	濃い青灰色 (橙)	〃	⑱	布目23×24本 (3×3cm)	0.395	1.71	7.11	0.313	0.26	II
24	〃	〃	〃	?	2.5	褐色	ややあまい	○	0.705	0.298	3.35	0.884	0.243	I'	
25	〃	C	細い細目叩き	布目そのまま残す	1.3	灰黒色	堅緻	⑲	0.473	1.31	7.68	0.360	0.179	II	
26	〃	〃	〃	〃	1.7	〃	〃	⑳	0.462	1.30	7.61	0.338	0.178	II	
27	〃	〃	〃	〃	1.6	〃	ややあまい	㉑	0.443	1.16	7.64	0.335	0.166	II	
28	〃	〃	〃	?	1.7	〃	〃	㉒	0.448	1.72	7.45	0.300	0.233	II	
29	〃	〃	〃	?	1.2	〃	〃	㉓	0.423	1.10	7.42	0.324	0.154	II	
30	〃	〃	〃	布目そのまま残す	1.5	淡い灰黒色	〃	㉔	0.368	1.33	7.58	0.272	0.181	II	
31	〃	〃	〃	?	1.5	〃	〃	㉕	0.354	1.32	7.84	0.250	0.174	II	
32	〃	〃	〃	?	1.5	〃	〃	㉖	0.321	1.24	7.92	0.213	0.169	II	
33	〃	〃	〃	布目そのまま残す	1.4	灰黒色	堅緻	㉗	布目27×24本 (3×3cm)	0.422	1.28	6.78	0.316	0.162	II
34	〃	〃	〃	?	1.5	橙褐色	あまい	○	0.430	0.29	6.43	0.329	0.231	II	

番号	種別	型式	凸面	凹面	厚み (最大・cm)	色調	焼成	備考	K	Ca	Fe	Rb	Sr	産地 分類
35	〃	D	粗い縄目叩き	布目そのまま残す	1.9	青灰色	堅 緻	⊙	0.684	0.356	3.19	0.578	0.327	I
36	〃	E	やや粗い縄目叩き	布目ナア消し	2.8	橙 色 (濃い青灰色)	〃	⊙	0.451	1.45	7.07	0.344	0.208	II
37	〃	F	〃	布目ハケ消し	1.9	濃い青灰色	〃	⊙ 諸川瓦窯に 類似品あり	0.482	0.986	7.64	0.341	0.134	II
38	〃	G	やや粗い縄目叩き→ 一部ナア消し	布目そのまま残す	2.7	〃	〃	⊙	0.783	0.353	3.00	0.969	0.217	I'
39	〃	H	ヘラケズリ	布目そのまま残す (一部ヘラケズリ)	2.7	橙 色	〃	⊙ 諸川瓦窯に 類似品あり	0.428	1.01	8.17	0.326	0.181	II
40	〃	〃	〃	?	2.8	青灰色	〃	⊙	0.532	0.779	7.14	0.478	0.161	II
41	〃	I	?	?	3.8	淡い青灰色 (淡い橙色)	ややあまい	⊙	0.705	0.294	2.69	0.914	0.227	I'
42	〃	〃	?	?	4.4	(〃)	〃	⊙	0.475	1.37	7.06	0.376	0.183	II
43	〃	〃	?	?	4.9	(〃)	〃	⊙	0.697	0.252	2.28	0.956	0.230	I'
44	〃	〃	?	?	5.2	(〃)	〃	⊙	0.684	0.254	2.42	0.924	0.225	I'
45	〃	不明	やや粗い縄目叩き→ ナア消去	? (一部ヘラケズリ)	1.6	淡い橙色	堅 緻	○ G 類 ?	0.468	0.748	7.31	0.380	0.118	II
46	〃	〃	ナ ア	布目そのまま残す	2.6	くすんだ青灰 色	〃	⊙	0.288	1.19	4.89	0.231	0.192	II
47	〃	〃	〃	〃	2.5	〃	〃	⊙	0.670	0.288	2.67	0.839	0.195	I'
48	〃	〃	粗い縄目叩き	〃	2.2	灰 黒 色	〃	⊙ D 類 ?	0.332	1.49	6.45	0.224	0.158	II
49	〃	〃	〃	?	2.2	灰 色	〃	⊙	0.455	1.57	7.24	0.317	0.211	II
50	〃	〃	〃	?	2.0	灰 黒 色 (橙 色)	〃	⊙	0.401	1.59	6.91	0.304	0.777	II
51	〃	〃	〃	布目そのまま残す	2.2	(〃)	〃	⊙	0.432	1.36	7.31	0.349	0.229	II
52	〃	〃	〃	〃	2.1	(〃)	〃	⊙	0.469	1.35	7.38	0.348	0.221	II
53	〃	〃	ヘラケズリ	〃	1.5	濃い青灰色	〃	⊙ H 類 ?	0.409	0.953	8.19	0.348	0.133	II
54	〃	〃	縄目叩き	布目消去	3.5	〃	〃	⊙	0.412	1.53	5.20	0.332	0.232	II
55	〃	〃	〃	〃	3.3	灰 黒 色	〃	⊙	0.359	1.14	5.46	0.346	0.239	II
56	〃	〃	〃	布目そのまま残す	2.1	淡い青灰色	〃	⊙	0.634	0.262	2.50	0.765	0.226	不明
57	〃	〃	〃	?	1.5	〃	〃	⊙	0.704	0.172	3.12	0.584	0.310	I
58	〃	〃	?	布目そのまま残す	3.1	灰 黒 色	〃	⊙	0.762	0.280	2.17	0.979	0.212	I
59	〃	〃	?	?	3.0	灰 黒 色 (橙 色)	〃	⊙	0.383	1.52	5.94	0.292	0.210	II
60	九瓦	A	ナ ア	布目そのまま残す		橙 色	ややあまい	○ 行基方式	-	-	-	-	-	-
61	〃	〃	〃	〃	1.5	灰 黒 色	堅 緻	⊙	0.381	1.30	6.56	0.247	0.173	II
62	〃	〃	〃	〃	1.5	〃	〃	⊙	0.502	0.935	6.52	0.337	0.125	II
63	〃	〃	〃	?	2.1	灰 色	〃	⊙	0.392	1.32	6.37	0.282	0.204	II
64	〃	B	?	布目そのまま残す	両部・2.0	〃	ややあまい	⊙ 玉 様 式	0.448	1.10	7.38	0.302	0.146	II
65	〃	不明	ナ ア	〃	1.9	橙 色	堅 緻	○	0.288	0.762	6.18	0.231	0.182	II
66	〃	〃	〃	〃	1.4	〃	〃	○	0.314	1.29	5.52	0.262	0.221	II
67	〃	〃	〃	〃	2.4	灰 色	〃	⊙	0.659	0.209	2.87	0.654	0.347	I

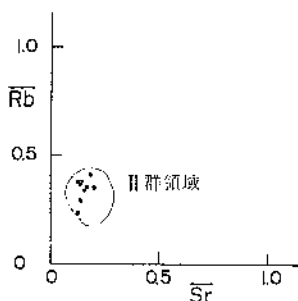
- 本表は、北村圭弘が資料の観察、試料の選取をおこない、三辻利一が分析した結果をまとめたものである。
- 試料については、再観察を可能にするため、分析母材のすべてを残している（びわ町教育委員会にて保管）。
- 焼成の○は酸化、⊙は還元、⊙は同一個体に両方あるものまたは中間色、()内は断面色を示す。



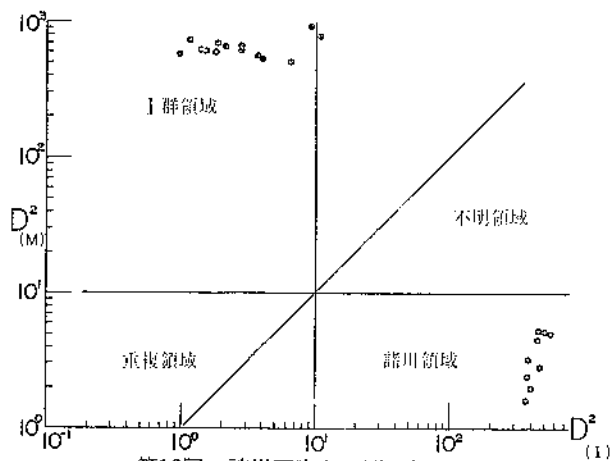
第9図 満願寺廃寺出土瓦の Rb-Sr 分布図



第10図 満願寺廃寺出土瓦の産地推定 (K, Ca, Fe, Rb因子使用)



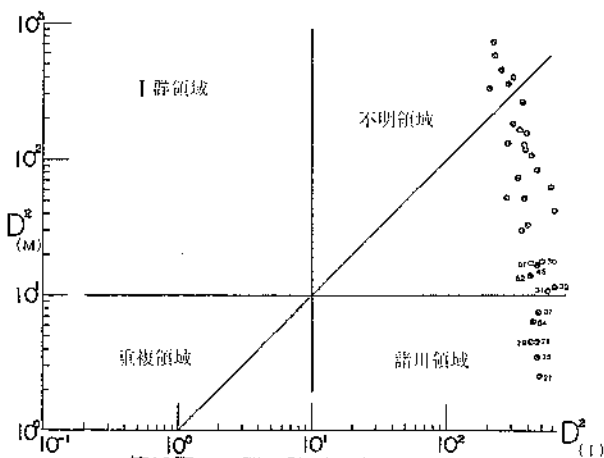
第11図 諸川瓦窯出土瓦の Rb-Sr 分布図



第12図 諸川瓦窯とI群の相互識別 (K, Ca, Fe, Rb因子使用)

	K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	0.455	1.36	7.64	0.346	0.195
2	0.486	1.19	7.36	0.407	0.184
3	0.441	1.16	7.74	0.353	0.166
4	0.514	1.09	7.32	0.381	0.136
5	0.505	0.910	7.26	0.376	0.126
6	0.414	1.05	7.33	0.342	0.157
7	0.493	0.997	7.18	0.373	0.138
8	0.381	1.01	7.81	0.232	0.124
9	0.414	0.897	7.35	0.286	0.137

第2表 諸川瓦窯出土瓦の 蛍光X線分析試料のデータ



第13図 II群の諸川瓦窯群への帰属 (K, Ca, Fe, Rb因子使用)

は正、負両方の値をとり得るので計算上の煩雑さを避けるため、二乗して負符号を消して使用するのが普通である。第10図で中央に引かれた傾線は両母集団が統計的に等価である場合の理想的境界線であり、線形判別関数と呼ばれる。この境界線を境にして両母集団は別れる訳である。しかし、判別分析ではこの境界線は余り使用しない。全国各地の窯跡出土須恵器の分析データから、各母集団（窯または窯跡群）のサンプルの95%以上のものが $D^2_{(X)} \leq 10$ （Xは母集団名）の領域に分布し、その結果、各母集団への経験的帰属条件が $D^2_{(X)} \leq 10$ であることがわかったからである。第10図でもⅠ群の瓦は14点中13点が $D^2_{(I)} \leq 10$ の領域に分布しており、またⅡ群の瓦も34点中32点が $D^2_{(II)} \leq 10$ の領域に分布していることがわかる。しかし、判別分析をする上には、この帰属条件だけでは不十分である。すなわち、両群の化学特性が類似してくると $D^2_{(I)}$ 、 $D^2_{(II)}$ の重複領域に両群のサンプルが分布し、相互識別が出来難くなるからである。両者が十分判別できるためには、互いに相手群からの距離を十分離しておかなければならないからである。この条件が $D^2_{(相手群)} > 10$ である。そうすると、Ⅰ群への帰属条件は $D^2_{(I)} \leq 10$ 、 $D^2_{(II)} > 10$ であり、Ⅱ群への帰属条件は $D^2_{(II)} \leq 10$ 、 $D^2_{(I)} > 10$ となる。第10図をみると、Ⅰ、Ⅱ両群はともにこの条件を十分満足していることがわかる。すなわち第9図で定性的に分類されたⅠ、Ⅱ両群はK、Ca、Fe、Rbの4因子を使った判別分析でも、Ⅰ群、Ⅱ両群に分類してもよいことを示した。この結果、平瓦A類およびD類はすべてⅠ群に分類された。また平瓦C類、E類、F類、H類および丸瓦A類、B類はすべてⅡ群に分類されることがわかった。他方、第9図でⅠ群、Ⅱ両群のいずれにも帰属しなかったⅠ'群などの9点のうち、No.49はⅡ群に帰属したが、他の8点は不明領域に分布し、Ⅰ群にもⅡ群にも帰属しない第3の群（Ⅰ'群）を形成することが第10図より読みとれる。Ⅰ'群に含まれるのは平瓦G類、それに平瓦B類、I類の一部である。また形式不明の大半はⅡ群であった。分析結果は表1にまとめられている。

次に、表1よりⅡ群の瓦はCa、Fe量の多い瓦であるが、これまでの分析結果では伊香郡西浅井町菅浦所在の諸川瓦窯出土瓦にも同様の化学特性がみられる。第2表に諸川瓦窯出土瓦の分析結果を示しておく。さらに、第11図のR b - S r分布図でも、諸川瓦窯の瓦はⅡ群領域に分布することもわかる。そこで、Ⅱ群の瓦の諸川群への帰属を検討してみた。その前に、Ⅰ群と諸川群を2母集団とした場合の2群間判別の結果を第12図に示す。両群は完全に分離し、それぞれ別群を形成することを明示する。さらに第13図にはⅡ群と分類された瓦の諸川群への帰属を示してある。 $D^2_{(M)} \leq 10$ 、 $D^2_{(I)} > 10$ の諸川群への帰属条件を満たすのはNo.25、26、27、29（以上平瓦C類）、37（平瓦F類）、64（丸瓦B類）の6点である。胎土分析の結果からはこの6点は諸川瓦窯産とみなされるが、ここではストレートにそのようには判断しない。第9図のR b - S r分布図より、Ⅱ群と分類された瓦はひとまとまりになっている。したがってこれらはひとまとまりにして諸川瓦窯付近の未発見の瓦窯のものの可能性があるからである。結論を急がず今後の研究の発展を待ちたい。

（三辻利一）

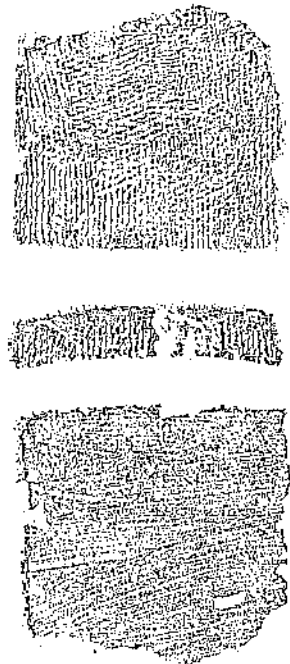
5. 考古学的にみた胎土の分析結果

ここでは以上の報告にもとづき、さきに想定した屋瓦の供給にかかる3つの西期ごとに胎土の

分析結果についての考古学的検討をおこないたい。

まず第1期の寺院の創建に伴うと想定した瓦類についてである。当該期に編年される瓦類は軒丸瓦A類、平瓦A類および丸瓦A類の一部である。この第1期の瓦のうち、分析された平瓦A類のすべてが産地Ⅰ群に分類された。軒丸瓦および軒平瓦については未分析であるが、軒平瓦の製作技術が共通することから産地は同じⅠ群である可能性が高い。しかしながら、分析された丸瓦A類のすべてが産地Ⅱ群と推定された。この点については予想外であるが、これまでの考古学の知見からは丸瓦のみ別途の場所で生産されたとは考えにくいことから、現状では今回分析対象となった丸瓦A類のすべてが、たまたま第2期に属するもののみであったと考えざるを得ない。このことは丸瓦A類の分析試料数の少なさと関連すると思われる。以上より丸瓦についてはなお再検討を要するが、第1期の瓦類は主として産地Ⅰ群から供給されたものとして大過ないように思われる。

ついで第2期は創建後の小規模な補修に伴うと想定した瓦類である。当該期に編年される瓦類は軒平瓦B類、平瓦B、D～I類および丸瓦A類の一部である。この第2期の瓦については、軒平瓦B類を除くすべての瓦が分析対象となった。このうち平瓦B類の一部およびD類がⅠ群に、I類の大部分、B類の一部、および軒平瓦B類に伴うと想定したG類がⅠ'群に分類された。これらについては出土量も分析試料数も少ないため、良好な結果は得られなかったように思われる。とくにB類については考古学的には同一形式に分類されたもかわらず、分析の結果では産地がⅠ、Ⅰ'、Ⅱの3群に分類された。この点についてはいくつかのパターンを想定し得る⁽⁴⁾が資料の充実を待って再検討したい。また産地Ⅱ群に分類された瓦には平瓦E、F、H類および丸瓦A類の一部がある。これらについても試料数が少ないという点では同様だが、このうちF類については諸川瓦窯とみなされる可能性が指摘された。このことについては、諸川瓦窯でF類に製作技術等の諸特徴の酷似するものが出土していることから考古学からの検討結果とも矛盾しない(第14図)。同じくE、H類についても諸川瓦窯で類似するものが出土している。これらは分析結果からは諸川瓦窯産の可能性は示されなかったが、諸川瓦窯については出土する多数の形式の平瓦のうち、今のところ縄目叩きの平瓦の小片しか分析されていないという点を考慮すれば、これら2種類の平瓦についても考古学的には諸川瓦窯の製品である可能性を完全には否定し切れない。丸瓦A類の一部についても同様である。もとより第2期の瓦類が小規模な補修用と想定される性格からして、必ずしもすべてが直接産地から供給されたとは限らない。このことは第2期の瓦の産地が少なくとも単一ではないらしいことから推測される。しかしながら諸川瓦窯が含まれるⅡ群産地については、後述するように第3期の瓦類の主産地と推定されることを考慮すれば、諸川瓦窯周辺



第14図 諸川瓦窯出土の
F類類似瓦S=1/4

の葛籠尾半島には、第2期の補修用瓦の生産段階において、すでに満願寺瓦屋（の一部）が存在した可能性が高いと推定される¹⁵⁾。

最後に第3期は他類とくらべて明らかに新しい要素を有し、しかも出土量が多いということから、大規模な補修あるいは改修に伴うと想定した瓦類である。軒平瓦C類、平瓦C類、丸瓦B類が当該期に編年される。ここで分析された瓦は平瓦C類および丸瓦B類であり、そのすべてが産地Ⅱ群に分類された。そしてこのうちのいくつかは少なくとも作図上では諸川瓦窯群への帰属条件を満たすものであった。しかしながら諸川瓦窯については発掘調査が実施されておりその結果では平瓦は桶巻き作り、丸瓦は行基葺式のものしか生産していないことが明らかとなっている。したがって一枚作りの平瓦C類や玉縁式の丸瓦B類が諸川瓦窯の製品ということについては考古学の成果とも整合しない。しかし観点をかえると少なくとも分析の結果では諸川瓦窯産とみなしてよいほど、胎土の化学特性は酷似していることがわかった。このことは先の指定どおり諸川瓦窯の周辺に平瓦C類や丸瓦B類を生産した未発見の瓦窯が存在した可能性の高いことを示していると理解できる¹⁶⁾。つまり第3期の瓦類は諸川瓦窯の周辺で生産されたと考えてよいと思われる。

以上をまとめると第15図のようになる。

（北村圭弘）

6. ま と め

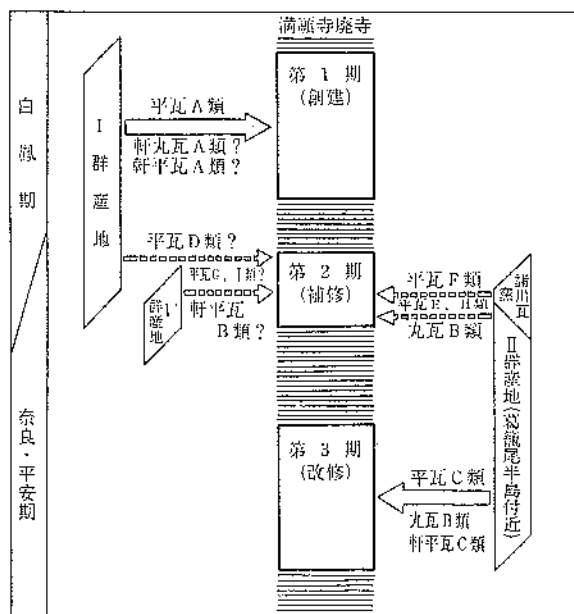
以上、満願寺廃寺出土瓦の産地について、考古学と分析化学の両側面から検討してきた。結果、確実性の高い事実としては少なくとも次の3点が指摘されるに至った。

①白鳳期から平安期にかけての屋瓦が継続的に出土し、屋瓦の供給には3つの画期が想定される。

②屋瓦の産地はおおむね3群に分類され、時間的には「Ⅰ群」⇒「Ⅰ群、Ⅰ'群、Ⅱ群」⇒「Ⅱ群」と推移する。

③3つの屋瓦の産地のうち、Ⅱ群の地理的位置については諸川瓦窯の周辺地域（葛籠尾半島）であり、創建後まもない第2期の補修用瓦の生産段階から満願寺廃寺瓦屋（の一部）が存在していた。

Ⅰ群、Ⅰ'群の地理的位置や産地推移の要因の究明など資料の増加をまって今後解決すべき課題も多いが、現時点では諸川瓦窯周辺の葛籠尾半島に満願寺廃寺瓦屋（の一部）が存在したという点が注目される。このことは、満願寺廃寺の運営にかかわった氏族の勢力が少なくとも葛籠尾半島付近にまでは「なんらか」の形で及んでいたこ

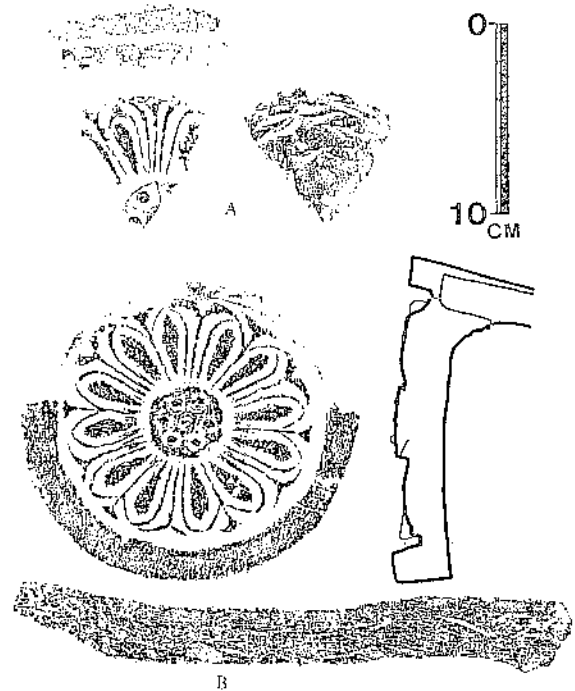


第15図 満願寺廃寺の画期と屋瓦の産地

とを示唆しているからである。

その「なんらか」の形態としてのひとつの可能性には葛籠尾半島の地理的条件から、大量の屋瓦を琵琶湖対岸の満願寺へ搬出するにあたっては、湖上の水運を利用するのが最も自然と考えられることがあげられる。つまりそれを可能とする背景には満願寺廃寺の運営にかかわった氏族が、これを可能とするような条件、すなわち北陸との交通の要衝である葛籠尾半島付近の琵琶湖上で一定の交通権を有していた可能性が推測されるからである。このことは満願寺廃寺出土の軒丸瓦の瓦当文様の類例が、今のところ全国的にみても北陸地方にしか分布していないということと関連する可能性がある。

(北村圭弘)



第16図 加賀市出土の「満願寺廃寺式」軒丸瓦
S = 1/4 (A : 津波倉廃寺、B : 宮地廃寺)
(BはAの退化型式)

[謝辞] 小稿をまとめるにあたっては木

立雅朗、小堀榮三、山崎清和、丸岡 寛をはじめとする諸氏、来現寺、びわ中学校、びわ町教育委員会をはじめとする諸機関より多大の御助力を得た。とくに記して感謝の意を表したい。

註

- (1) 中房の周囲に蓮子のめぐる単弁蓮華文の軒丸瓦で、「近江様式」「湖東系」軒丸瓦などと呼称されるものをさす。
- (2) 「満願寺廃寺」の遺跡名は、小字「マンガンジ」付近がその故地と伝承されたことに由来し、それを最初に報告した『東浅井郡志』が「満願寺」の文字を用いたことからこの名称で周知化されたものと推測される。しかし現行での行政上の小字名は「万願寺」であり、明治15年の『滋賀県小字取調書』でも同様の文字が使用されている。
- (3) 一般には伝世されてきたとされているが、地元では観音堂南側の貯水池を掘削した際、出土したとの伝承がある(来現寺住職三原氏の御教示)。

このことについては、観音像に後補の箇所が多く、戦後の指定文化財見直しの際、国宝から重要文化財に「降格」となったことと関係する可能性がある。なお貯水池の南側には現在では地藏堂となっている土壇状のかたまりがあり注目されるが、これも貯水池掘削の際の排土を盛り上げたものの可能性がある。

- (4) ①当初の分類目的が充分達成されておらず、さらに複数の形式に細分される。②工人が道具を携えて生産地を移動した などが考えられる。同一個体中に2種類の叩き板の痕跡が残るも

のもあることから、現状では①の可能性が高い。

- (5) 葛籠尾半島では白山遺跡でも瓦の出土が伝えられ、白鳳期の寺院遺跡として周知されている。未調査のため推測の域はでないが、遺跡の立地が山籠部であること、諸川瓦窯とは尾根をひとつへだてるのみで近接していることなどを考慮すれば、白山遺跡も瓦窯跡である可能性は高い。おそらくこの付近には一定の規模をもつ古代の窯業生産地が存在したものと推定される。

主要参考・引用文献

- ア・小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 1989年
- カ・北村 圭弘「古代の近江と加賀」『石川考古』第178号 石川考古学研究会 1987年
- 木立 雅朗「第3章第2節 瓦」『篠原遺跡』石川県Ⅱ埋蔵文化財センター 1987年
- 黒田 惟信『東浅井郡志』巻一、三 東浅井郡教育会 1927年
- 小堀 榮三『幼の塔を求めて東西—古代寺院跡の—研究—』1989年
- 小森 秀三他『北陸の古代寺院—その源流と古瓦—』北陸古瓦研究会、桂書房 1987年
- サ・滋賀県教育委員会『昭和60年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会 1986年
- タ・田路 正幸「「倉橋部廃寺」雑考」『紀要』第2号 (財)滋賀県文化財保護協会 1989年
- チ・西川 杏太郎『近江の仏像』日本の美術No.224 至文堂 1985年
- 西田 弘「近江の古瓦」『文化財教室シリーズ』(財)滋賀県文化財保護協会 1977年～1988年
- マ・三辻 利一・北村 圭弘「三大寺廃寺出土瓦の胎土分析」『米原町内遺跡分布調査報告書』米原町教育委員会 1988年
- 三辻 利一・北村 圭弘「八島瓦窯—瓦の需給関係と工人の動向—」『紀要』第2号 (財)滋賀県文化財保護協会 1989年
- ヤ・用田 政晴『諸川遺跡発掘調査報告書—西浅井町菅浦所在諸川瓦窯の調査—』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 1984年
- 吉田 秀則「Ⅰ、長浜市十里町・塚田・新庄馬場遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ—4』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 1986年

編集後記

本号には8編の論考を掲載することができました。職員の頑張りに頭が下がる思いです。ただ、少し気になることは、既刊寄稿者が多いということです。次号への課題といたしたいと思います。

翌年度は協会設立20周年。さらなる充実を期し、思いを新たにして出発いたします。今後ともご協力のほど、宜しくお願いします。
(普及啓発事業担当)

平成2年3月

紀 要 第 3 号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大菴町1732-2
TEL(0775)48-9780・9781

印 刷 大津紙業写真印刷株式会社
大津市月輪三丁目9-33
TEL(0775)44-0190(代)